

Title	Gallia 57号 卒業論文要旨
Author(s)	
Citation	Gallia. 57 P.135-P.137
Issue Date	2018-03-04
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/69859">http://hdl.handle.net/11094/69859</a>
DOI	
rights	
Note	

***Osaka University Knowledge Archive : OUKA***

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

## 卒業論文要旨

フランス語における歯擦音の古フランス語期からの通時的研究

田 中 聖 人

本論文では、apical s という音の存在を鍵に、古フランス語期の子音体系の再建を当時の文献の調査によって目指すとともに、あまり今までにフランス語の子音体系には想定されることがなかった音である、apical s そのものの解明を目指した。この apical s という音は舌尖で調音される歯擦音の類であり、現存する印欧諸語においてこの音を保持する言語は稀ではあるが、この音が関わっていると想定される現象については多くの研究がなされてきた。しかしそれも 20 世紀後半以降あまり盛んになることはなかった。そこで André Martinet らによる通時的、機能的、構造主義的な音韻論や比較言語学といった手法を取り入れつつ、apical s に関連する子音体系について考察を行った。

具体的な手法としては、借用関係と、言語ごとの綴りと発音の発達関係を見るべく、古フランス語期において借用関係のあった英語とドイツ語のテキストを時代ごとに調査した。さらにフランス語の発達を見ていくことによって、古フランス語期における子音体系そのものを、Martinet (1952) において提唱された通時音韻論的な考えである、引き連鎖という概念によって apical s の消失や、子音体系の変化の動きを説明することで、再

建を試みた。この apical s を古フランス語期に初めて想定した、Joos (1952) の問題点が全て解決したとまではいかないものの、Martinet の考えをうまく適用することができたと思われる。

しかし、apical s の母音への影響や、有声子音の動きに関してはまだ不明瞭なところが多く、今後の課題とする。この apical s が比較言語学や音韻論の難問を解決に導いていく鍵となることを期待する次第である。

ラディゲ『ドルジェル伯の舞踏会』における「田舎」の機能

堤 崎 暁

本論では、自然が溢れる空間 - 以後「田舎」と総称する - が『ドルジェル伯の舞踏会』の中で果たす機能についての考察を進める。ラディゲの死後 1924 年に発表されたこの小説の主人公であるフランソワは、ドルジェル伯の妻マオに惹かれる。その中で「田舎」が彼らに吹き込む様々な感情は、三人の人物を繋ぐ複雑な関係に決定的な影響を及ぼしている。

第 1 章では回想録の形式で書かれた『イル＝ド＝フランス、愛の島』におけるラディゲと、『舞踏会』のフランソワを比較する。両作品の比較を進める中で、主人公と作家の間の共通点が浮かび上がる。両者は共に都市への嫌悪や「田舎」への愛着を抱いており、『舞踏会』

のエピソードの中にはラディゲの実人生と一致するものも見られる。しかし、家庭環境や交際関係における相違点も見られることから『舞踏会』は自伝的小説ではなく、主人公に作家のイメージが投影されたフィクション小説であると考えべきだろう。

第2章では『舞踏会』の物語における「田舎」に焦点を当てる。フランソワとマオが「田舎」の話に花を咲かせる際、ドルジェル伯は一人傍観者となる。「田舎」を好むフランソワとマオ、好まないドルジェル伯という対立構造は作中で散見され、三人が「田舎」へ赴いた際には彼らの感情に変化が現れる。つまりこの物語において「田舎」は、恋愛を進展させる舞台装置となっていると考えられる。

『イル＝ド＝フランス、愛の島』の中でラディゲは、故郷に実った果実を思い起こし、そこに官能性を見出している。また、パリに住み始めた彼は都市の喧騒や仕事から逃避するためにしばしば故郷へと赴いていた。つまり彼にとって「田舎」は、官能性の宝庫であると同時に都市からの避難所でもあった。

以上のことから、都市の喧騒や執筆活動で疲弊したラディゲは物語の主人公に自分を重ね、愛する「田舎」において『舞踏会』の筋を展開させることで、自身の郷愁の念をフランソワに託したと考えられる。

『バジャゼ』における視線と令状  
—アミュラ帝の不在をめぐって—

角 田 郁 晃

本論では、ラシーヌ悲劇『バジャゼ』におけるアミュラ帝の役割を考察し、アミュラ帝がいかにして『バジャゼ』を特徴づける陰惨な結末を引き起こしたかについて論ずる。これまで、アミュラ帝は劇中に登場することがないゆえに、その役割の重要性が見過ごされてきた。しかしながら、『ブリタニキウス』や『ミトリダート』、『フェードル』といった類似するテーマやモチーフを有する作品群と比較しても、アミュラ帝が劇中において重要な役割を果たしていることは明らかである。ここにおいて視線と令状という2つの重要な要素が浮き彫りとなる。

ラシーヌ悲劇では視線が特権的な意味合いを帯びるが、『バジャゼ』において視線は権力を抑制する役割を果たしている。『ブリタニキウス』ではアグリピーヌとネロンが相互に「見る」—「見られる」ことで権力の均衡を保っているが、『バジャゼ』ではアミュラ帝は不在であるがゆえに一方的に「見る」存在となり、アミュラ帝と登場人物達の間を上意下達の支配構造が形成される。ここで後宮はパノプティコンと化し、フォーコー的監獄へと変貌する。

『ミトリダート』と『フェードル』でどんでん返しを引き起こした王の帰還は、『バジャゼ』では令状の通達によって代替される。記号の恣意性にさらされた後宮内では、話し言葉に代わって書き言葉が真実を担保する指標となる。それゆえ人物の発話ではどんでん返しを起こ

し得ず、令状という媒体が必要となってくる。令状が一義的に真実を保証するものとなることで、その機能である命令の効力が最大限に発揮され、令状は陰惨な結末を導くことができるようになる。

アミュラ帝は不在であることで、視線で支配構造を形成し、令状の特性を存分に生かして陰惨な結末を引き起こした。スルタンであるアミュラ帝は、劇中に登場しないがゆえに絶対的権力者となり得たのである。

ロマンティック・バレエ『ジゼル、又はウィリ達』における男性登場人物と男性観客の関係について

#### 道 廣 千 世

本稿では『ジゼル、又はウィリ達』に登場する男性と19世紀オペラ座の観客層の中心だった男達との関係を考察する。観客がバレリーナと関係を結ぶ慣習があったロマンティック・バレエでは、男性舞踊手は観客から嫌悪され、女性達の影に追いやられる。しかし先行研究により、19世紀前半のバレエでは男性の登場人物数が女性を上回ることが示された。つまりこの時期でも男がバレエに欠かせない要素であり、彼らを嫌悪した男性観客と密に関係していたと推測できる。

第1章では『ジゼル、又はウィリ達』に登場する二人の男、アルブレヒト及びヒラリオンの物語における機能を考察する。前者はバレリーナと関係を結ぶパトロンの分身、後者は物語の狂言回しとする先行研究の指摘に加え、この章では彼らが男性観客の視線を体現していたこと

を示した。幾度も盗み見をする初演版の二人は、男が踊る女を見るという当時のオペラ座を反映するものと考えられる。

第2章では彼らの人物像を分析する。現代とは異なり、初演ではアルブレヒトは善人、ヒラリオンは悪人として演出、解釈されたことを示した。この認識は第1章で考察した前者の観客の分身という機能によるものであり、いずれの人物像にも男性観客の視線が影響している。

第3章では外見と内面の関係を検討する。当時のオペラ座では男性の肉体を「醜い」ものとして嫌悪、嘲笑する風潮があり、これは当時のバレエにおいて「醜い」道化役や「醜い」男の死に反映される。さらに容貌と性質を同一視する傾向により、美男のアルブレヒトは善人、醜男のヒラリオンは悪人となり、後者の死は男の踊り手に対する観客の嫌悪を示すものだと結論した。

このようにアルブレヒト及びヒラリオンの機能、人物像には当時のオペラ座が反映されている。つまり彼らは、当時の男性観客が抱いた自らの理想像と嗜好の映し鏡だと言える。